

月報 84号	発 行 所 青丘文庫 編集・発行★韓 哲 曠 〒654 神戸市須磨区須磨寺町4-3-1 メゾンド青丘ビル2階 TEL(078)734-5989 FAX 735-0660
------------------------	---

朝鮮民族運動史研究会 第121回例会

植民地教育の浸透—受容と抵抗

佐野通夫

1910年代朝鮮人父母が公立普通学校に対して持っていた抵抗感と嫌悪感は、1920年代に入って緩和し始めた。

1910年5月の段階では、日本主導の教育機関には1万2千名余りが在籍する一方、私立学校に8万名が在籍し、伝統的教育機関である書堂も引続き存続していた。書堂の学生数は1911年の14万人から1921年の30万人にまで増加している。

日本の植民地支配の間、公立普通学校の在籍者数は増加している。しかし、就学率としてみると、植民地支配末期に至っても、50%に至らなかった（日本の場合、1872年の近代学校制度創設から約20年（1891年）で就学率が50%を超えている）。義務教育制度はついに実施されなかった。

1912年から1929年までを見てみると、志願者は1913年に減少し、1917年に小さな山を迎え、22年まで増加した後、減少していく。一般的には、20年代の「教育熱」と経済的困窮が原因であるとされるが、この変化をどう分析すべきか。この後、志願者は再び増加するものの、1932年度にまた減少している。

韓祐熙「日帝植民統治下朝鮮人の教育熱に関する研究—1920年代公立普通学校を中心に—」（ソウル大学校教育史學會『教育史學研究』第2・3集、拙訳四国学院大学『論集』第81号所収）は、当時の小作人、都市貧民の経済生活の中で教育費が持っていた重みを分析し、「教育熱」の背景にある階級関係を明らかにしようとしている。

さらには、募集定員のしめされている1937年度までの間に、入学志願者は募集定員を上回っているにもかかわらず、入学者数は定員を下回り、70%程度の充足率しか見せないことがある。植民地当局が学校の浸透を積極的に図っているのなら、その「定員」はフルに活用されてしかるべきである。植民地当局の学校認識はどのようなものであったのか。

これらをもとに、標記の課題について、日本によって作られた学校（制度）への民衆の対応という観点から、その背景にある（日本）国家支配の社会への浸透として、日本国内の場合と比較しつつ、明らかにすることを試みた。

韓国キリスト教受容史研究

蔵田雅彦（桃山学院大学）

韓国のキリスト教は、18世紀末にカトリックが、19世紀末にプロテスタントが伝えられたが、今日人口の約4分の1、1000万人を越える人口を擁している。このようなキリスト教人口の爆発的な急増がなぜ可能であったのだろうか。南北の分断と反共イデオロギーの浸透、急速な工業化と都市化に伴う疎外感など、政治社会学的、あるいは宗教社会学的な分析も行われているが、歴史的視点からキリスト教受容の特色を明らかにすることにより、問題解明の糸口を提供できるのではないだろうか。

韓国におけるカトリックの受容は、中国経由で行われたが、李朝時代の度重なる迫害のために十分に根を下ろすことは出来なかった。これに対し、プロテスタントの受容は、開国と近代化という時代状況のもとで、比較的スムーズに行われた。従来、日本のプロテスタント受容に関しては、武田清子氏の思想史的接近による分析や、隅谷三喜男氏や工藤英一氏の社会経済的接近による分析などが行われている。韓国キリスト教受容史においても、思想史的接近と社会経済史的接近を併用して解明することが望ましいと考えられる。

この分野における先駆的業績としては、韓国教会史家の閔庚培教授が、一連の著作（『韓国基督教教会史』、『韓国民族教会形成史論』、『教会と民族』等）の中で、キリスト教の受容形態を、畿清型（両班・儒教層中心の受容）と西北型（大衆受容型）というように類型化した。これは、社会階層の違い、地域性の違い、経済的基盤の違いなどに基づいて、思想・信仰的傾向や外来思想への受容の度合いを類型化した興味深い分析である。

初期の韓国教会の成長の要因としては、民族主義との結合、および復興会（リバイバル集会）による信仰の熟成などが挙げられる。社会参与と信仰的深まりという二つの側面が、日本帝国主義の侵略に伴う、生命・財産の不安、国権の剥奪による絶望感などキリスト教への入信の動機と関係していると思われる（李萬烈『韓国基督教と歴史意識』）。西欧の帝国主義国にではなく、日本によって支配されたことが、西欧の宣教師による宣教活動に有利に動いた点も見逃せない（尹慶老『韓国近現代史のキリスト教史的理解』）。

しかし、韓国キリスト教の受容に関して、様々な外的要因と共に、内発的要因に着目する必要がある。社会経済史的な観点からは、とくに西北地方においてキリスト教への入信層がいわゆる“自立的中産層”であったことが指摘されている（李光麟教授）。さらに、実証的な研究として、尹慶老教授は、105人事件の連座者の職業や教育程度などの分析を通して、西北地方におけるキリスト教と民族主義の結合、およびキリスト教の大衆受容の背景に、いわゆる新興ブルジョアジーの存在があったことを明らかにした。（『105人事件と新民会研究』）。

宣教団による宣教区域分割において、西北地方は長老教の地盤となっており、解放前のキリスト教の急成長の中心地であった。しかし、解放後、南北分断、朝鮮戦争などによって、北のキリスト者は迫害を受け、多くのキリスト者が南へ逃れ、1980年代に入って国外のキリスト教との交流が始まるまで、北朝鮮においてはキリスト者の存在すら確認できない状態であった。従って、解放後の韓国教会の成長は、急速な工業化と都市化など、解放前の諸要因とは異なる要因によるものと考えられる。しかし、キリスト教受容期に形成された、民族主義的信仰と、敬虔主義的かつ熱烈な信仰形態は、韓国教会の伝統として、今日まで根づいている。

朴憲行氏の証言を聞く（解放後編）

昨年の一月に続き朴憲行氏に来ていただき、解放後の体験談をお聞きした。前回の解放前の話が好評で、機会があれば解放後の話もぜひ、といっていたのが実現した。周知のとおり朴憲行氏は『軌跡―ある在日一世の光と影』の著者。解放前は左翼的労働運動に依拠した民族運動に、解放後は建青（後に民団に合流）の運動に投身して活動した記録を著述したもので、この本の内容に沿って話していただいた。

解放直後は本国への帰国を希求、いろいろな事情で本国には帰れなくなると、民族的な運動をしたい気持ちが生じた。民族組織には朝連と民団があつて対立しており、どちらの組織に加わるか悩んだ。結局信託統治の問題が決定的となつて建青に入ったのが運命の分かれ道になつたという。

生活は闇市での衣類業と食堂が繁盛して安定した。戦争中はあれだけの不足だつたのに、闇市ではすべてのものがそろっているのはびっくりしたそう。当時の大阪の闇市は、現在のマルビルあたりから南に広がり、後には中国人、朝鮮人、日本人がそれぞれ派閥をつくつて抗争したという。

建青での活動は、まず尼崎に支部をつくることから始まる。支部設立を阻止しようとする朝連とのにらみ合いで、米軍の出動騒ぎまで起こる。設立大会には映画館を借り切って歌手の小畑実を呼んだが、この人は後で朝鮮人だということが分かった。初代民団団長の朴烈も参加した。

朝連の民青に対抗して建青でも尼崎で行動隊を組織する。これが明石をはじめとする流血事件で、「アラン部隊」として名をはせることになる。明石での流血事件とは、行動隊が姫路支部開

設の応援に行く途中、明石の朝連事務所を破壊したことが原因で、帰路に朝連に待ち伏せをされ乱闘となり、朝連の若者一名が死亡した事件である。朝連との対立の中で、地方に支部をつくることは容易でなかつたが、兵庫の建青が支部つくりを果たした役割はきわめて大きいという。

当時の建青は特配が財源であつた。この特配（ビール）を暴力団の町井組が横取りするのを阻止する為、アラン部隊が東京へ呼ばれた。そこで横取りに来た町井組の坂本という組員を殺害するという事件が発生する。いわゆる「坂本事件」であるが、朴憲行氏はその時の状況を生々しく証言、その時の感情の高ぶりで殺害にまで至つたしまつた出来事が、今でも時々脳裏に浮かぶという。

氏は、自分がかかわつた民団四〇年の歴史のなかに三度の変革期があつたと整理する。一度目は一九四八年から四九年の建青の分裂で、これによつて旧親日派の連中が民団に巣食うようになった。二度目は六〇年代の朴政権の軍事クーデターの時期で、権力と派閥の陰謀がからむ事件が続発し旧親日派が台頭、指導は本国サイドよりになり、民団本来の性格と活動を大きくゆがめた。三度目は六九年の「録音テープ問題」の時期で、本国の指導に反抗する者はすべて切り捨て、分裂が決定的になつた。

こうした時代整理にも見られるように、氏の旧親日派や本国から来た公使や領事を見る目は極めて厳しく、著書が文字どおり「焚書」にされてしまつた原因ともなつた。

民団の創世期から七〇年代までを振り返り、「自分が歩んで来た道は自信を持って正しかったとは言えない」という。組織の中に入ると、おかしいと思つても、どうしても引きずられてしまうからだ。また、心を割つて話せる友人には、同胞よりも日本人のほうが多いのは寂しいことだともいう。

◆新着図書御案内◆

濟州 新報	1947年4月1日～1947年8月30日	
滿鉄調査月報	第1巻～第43巻	南滿州鉄道株式会社
	[昭和6年9月～昭和19年2月]	
国史大辞典	第一巻～第十三巻	国史大辞典編纂委員会
北京大学図書館	館藏朝鮮学書目江編	北京 北京大学朝鮮文化研究所
旧植民地関係機関刊行物総合目録	滿州国、關東州編	アジア経済研究所 1982年
//	索引編	// 1981年
//	台灣編	// 1987年
延吉 [연길]		北朝鮮民族教育出版 1992年
图们江区域开发資料江編		// 1992年
珲春符区政策江編		// 1992年
珲春开发开放区総合資料		// 1992年
延辺旅游指南		吉林省 延辺大学出版社
建設模範自治州		// 吉林人民出版社
对外経済貿易基本常識		// 延辺日報社
珲春及周辺国家〔地区〕概況		延辺 延辺大学出版社
东北亚地域开发研究 論文集		// 延辺人民出版社
남조선문화 개관		// //
朝鮮族研究 論丛 [三]	延辺大学民族研究所	// //
中国朝鮮族歴史跡 丛书 [四]	延辺	// //
台灣大年表 (明治28年～昭和31年)		台灣経世新報社 緑蔭書房
朝鮮日報縮刷版	1993年1月	
東亜日報縮刷版	1992年6月～11月	
朝鮮新報縮刷版	1992年1・2月～7・8月	

◇研究会御案内◇

合同研究会	1993年5月16日 (日)	
1部 朝鮮民族運動史研究会	第123回例会	
時間	午後3時半～5時半	
報告者	堀内 稔氏	
テーマ	「朝鮮人のアナキズム思想の受容と展開」	
2部 在日朝鮮人運動史研究会	第155回例会	
時間	午後1時～3時	
報告者	梁 泰昊氏	
テーマ	「日本国憲法と在日韓国朝鮮人」	
日韓キリスト教史研究会	第32回例会	
日時	1993年5月22日 (土)	
報告者	藤岡 羊子氏	
テーマ	「崔 容信について」	

※場所はいずれも青丘文庫にて